

埋蔵文化財調査センター  
ニュースレター

## 特集 礫集中

竪穴住居址では、その内部に土坑、柱穴、炉址などの遺構のほか、床面に潰れた土器や複数の礫が集中した状態で発見されます。後者を「礫集中」と呼称します。遺構、廃棄状態がどのように床面に残されたかを精査することによって、当時の生活の一端を解明することができます。

擦文期では、竪穴住居址床面で発見される礫集中がどのように形成されたのか、また本来の機能が何だったのかについては、未だよくわかっていません。

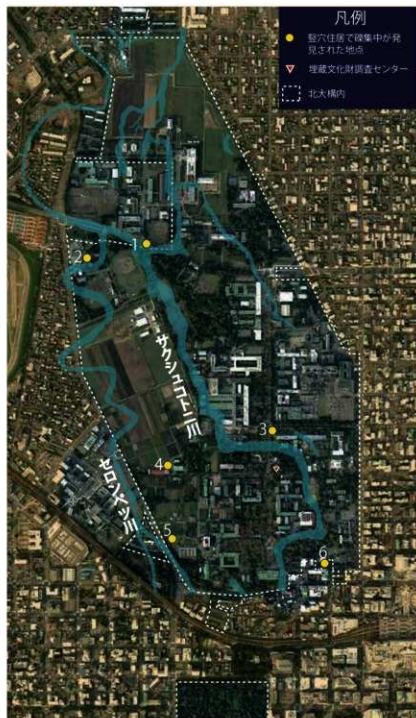
本特集では、これまでこの北大構内の竪穴住居址で発見された礫集中を集成し、各々の礫の大きさ・重量、確認位置を紹介することによって、その機能が何であったのかを考えてみます。



## ▲ 竪穴住居址の床で発見された礫集中

K39遺跡北方生物圏フィールド科学センター実験実習棟地点では、第101号竪穴住居址（HP101と表記）が見つかった。近代の開発によって失われていた部分を除くと、全体の約3/4の規模が調査で明らかとなった。HP101の床面では、長軸約10cmの礫が約50点発見された（左上写真）。竪穴住居址の時期は、出土した土器の特徴によって、擦文中期（約10世紀）と推定する。

## 竪穴住居址で発見された礫集中



▲農学部実験実習棟地点第2号竪穴住居址 (HP02) で確認された礫集中 (縄文後期)



▲応用電気研究所前地点の竪穴住居址で確認された礫集中 (縄文後期)



▲職員厚生施設地点の竪穴住居址で確認された礫集中 (縄文後期)

番号	地名	時期	出土品類	確認期	確認位置	出土品数	報告書名	備考
1	K2埋蔵跡 エムムントムル地点	a	縄文後期 (約12世紀)	HP02	1層 北西壁	140点	K2埋蔵跡第1次調査 2001 札幌市教育委員会	5a層
		b	縄文中期 (約11世紀)	HP04	2層 東東隅	45点	K2埋蔵跡第1次調査 2001 札幌市教育委員会	6a層 第1号礎石と埴輪
		c	縄文中期 (約11世紀)	HP04	2層 東隅	21点	K2埋蔵跡第1次調査 2001 札幌市教育委員会	6a層 第1号礎石と埴輪
		d	縄文中期 (約11世紀)	HP08	1層 中央	29点	K2埋蔵跡第1次調査 2001 札幌市教育委員会	6a層 第4号礎石と埴輪
		e	縄文中期 (約11世紀)	HP12	1層 西隅	121点	K2埋蔵跡第1次調査 2001 札幌市教育委員会	6a層 第1号礎石と埴輪
		f	縄文中期 (約11世紀)	HP13	1層 東隅	130点	K2埋蔵跡第1次調査 2001 札幌市教育委員会	6a層 第1号礎石と埴輪
		g	縄文中期 (約11世紀)	HP23	1層 北壁	132点	K2埋蔵跡第1次調査 2001 札幌市教育委員会	6a層 第1号礎石と埴輪
		h	縄文中期 (約11世紀)	HP24	1層 東隅	37点	K2埋蔵跡第1次調査 2001 札幌市教育委員会	6a層 第1号礎石と埴輪
2	K2埋蔵跡 東本館地点	縄文中期 (約11世紀)	HP02	1層 西壁	10点	サワシユコニ川遺跡 1996 北海道大学		
3	K2埋蔵跡 応用電気研究所前地点	縄文後期 (約12世紀)	竪穴住居址	1層 南壁	39点	北大構内の遺跡① 1981 北海道大学埋蔵文化財調査室		
4	K2埋蔵跡 北方生物圏フィールド科学センター実験実習棟地点	縄文中期 (約10世紀)	竪穴住居址	1層 北東隅	48点	2013年度埋蔵文化財調査報告書作成中。		
5	K2埋蔵跡 農学部実験実習棟地点	a	縄文後期 (約12世紀)	HP02	2層 南西壁	11点	北大構内の遺跡② 2016 北海道大学埋蔵文化財調査センター	
		b	縄文中期 (約11世紀)	HP02	2層 南西隅	41点		
6	K2埋蔵跡 職員厚生施設地点	縄文後期 (約12世紀)	竪穴住居址	1層 南東壁	66点	北大構内の遺跡① 1991 北海道大学埋蔵文化財調査室		

## ■ 礫集中とは

礫集中とは、約10点～約130点の小石が竪穴住居址の床面の一定の範囲内にまとまった状態で出土したものです。織具の錘として用いられた礫との見解がある一方、漁具の網の錘として利用された礫であるとする見解もあります。どちらの場合も、小石(礫)の一つ一つを「石錘(せきすい)」と呼びます。

織物用の石錘は、敷物などを編む際に、緯材に絡める経材(紐)に吊るして用いられます(下の写真)。民具例では、織布には100g以下の細長い礫が用いられ、すだれ・むしろには約80g～約300gの礫が織具で用いられています(渡辺1981)。漁具としての刺し網・投網では、約10g～約30gの石錘が網の縁に取り付けられていた民具例(石川県)が知られています(山本2011)。

民具の援用が正しいならば、両者の間には重量の点で明確な差があるようです。

渡辺誠 1981 編物用織具としての自然石の研究 名古屋大学文学部研究論集(史学) 27  
山本直人 2011 縄文時代の打欠石錘の用途に関する一考察名古屋大学文学部研究論集(史学) 57



▲織具(20世紀:北海道の民具)

北海道開拓記念館「北海道の基盤文化をさぐる」2003年刊行から引用

## ■ 礫集中が発見される位置

竪穴住居址内では、礫集中が床面上の偏った位置で発見されています。構内で確認された14例の礫集中の内、カマドとの位置関係が推測できた礫集中を10例取り挙げた結果、カマドが附設された壁と反対側に遺棄される傾向をとらえました。



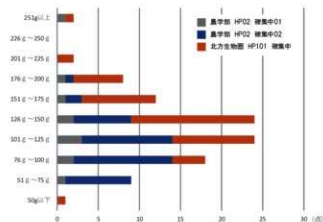
▲竪穴住居の床面で礫集中が確認された位置  
(黒丸内の番号は2頁の表に記した番号と対応する)

## ■ 礫の重量と大きさ

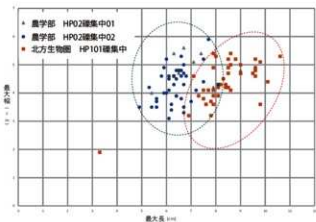
構内の竪穴住居址で発見された礫集中の内、2地点計3基の礫集中を取り上げ、重量と大きさを比較しました(下記に示したグラフを参照)。

2遺跡3基の礫では、120g～150gまでの重さの礫が多数である一方、重量の偏りに若干の違いがみられます。北方生物圏フィールド科学センター実験実験棟地点の礫集中(原文中期:約10世紀)では、125g～150gの礫および151g以上の礫の点数は多い傾向があります。農学部実験実習棟地点で発見された礫集中2基(原文後期:約12世紀)では、100g以下の礫が多数のようです。

各地点の礫集中で発見された礫の大きさを比較した結果、概ね類似した規模であるとわかりました。下段右の散布図に示したとおり、各地点での最大幅はほぼ同じ規模です。ただし、最大長は地点ごとに異なっています。



▲各地点で発見された礫の重量



▲各地点で発見された礫の大きさ

## ■ 鍾(すい)と呼ばれていた武器

「かねへん」(金)に「たれる」(垂)で、「スイ・おもり」です。「紡鐘」とは「つむぐ」(紡ぐ)のための「おもり」(重り・鐘)、「おもり」を用いて「つむぐ」という意味になります。

さて、古代中国の歴史書「史記」、「漢書」では、「鍾」と呼ばれた武器が登場します。鍾とは、柄の先端に鉄球を取り付けた打撃具です(右写真矢印)。鉄鏝の上から打撃を加えて、致命傷を与える武器であった反面、重量のために持ち運びが不便であったようです。

早くも紀元前には武器として登場した鍾は、宋代、元代にも活発に用いられ、その様子は「東方見聞録」で紹介されています。

戦争武器の多様性ととともに、ものの自重を活用した道具が古から用いられていたと分かります。

骨朵(鍾の一種)を右腕で持つ人物  
林伯原 中国美術史 2015年の巻頭写真から引用、加筆



## ■ 2021年度北方生物圏フィールド科学センター実験実習棟地点の整理作業【速報】

北方生物圏フィールド科学センター実験実習棟地点の発掘調査の後、整理作業を2021年10月から現在までおこなっています。昨年の調査によって出土した遺物の洗浄、注記をするとともに、破片となった土器片を接合して形態を復原する作業、実測図作成をおこなっています。来年度、発掘調査報告書を刊行する予定です。



▲作業の様子

## ■ 2022(令和4)年度の公開・普及活動の予定

2022(令和4)年度は、以下の活動予定があります。

○人類遺跡トレイルウォーク  
北大キャンパス内にあるサテライトをテーマに基づいて、訪ね歩きます。

○企画展示  
ニュースレターの特集、調査成果報告会に合わせた企画展示を行います。

○調査成果報告会  
2022(令和4)年度の発掘調査成果の紹介と考古学に関連の深い分野の専門家による特別講演会を実施します。

## 編集後記

據文期の竪穴住居址で発見される礫集中を集成することで、その機能を推測しました。礫集中の機能を特定することには課題があります。

今後の発掘調査では、礫具の鍾と考えられる石鏝の発見状態に注目して、精査を進めたいと考えます。(守屋)

北海道大学埋蔵文化財調査センターニュースレター第41号

発行 : 北海道大学埋蔵文化財調査センター  
〒060-0811 札幌市北区北11条西7丁目

電話 : 011-706-2671 FAX : 011-706-2094

e-mail : hokudaimibun@gmail.com

URL : <http://maibun.facility.hokudai.ac.jp/>